らば、また收拾すべからざるに至るべきや必せるものがあつた。されば、靜寛院宮は、此の書狀を親しく染筆し給ひて岩倉具定卿の陣所に送り、しばらくの進軍を止めん事を求め給うたもので、御憂慮の程紙面に溢るゝものがある。殊に追書に於て「御征伐御止候樣願候にては決して無之候まゝ、あしからす御聞取の樣」と記され給ふ數行は、洵に至誠の御言葉にして天地爲に感動するものあるを思はしめる。

かくして江戸開城も事無く完了し、平和裡に維新の鴻業を成就し得たりし所以のものは一身を朝幕の間に捧げ、以て和平を圖らしめ給ひし靜寛院宮の御力多きにある事は毫も疑を容れざる所、其の御令德懿行は眞に婦人の鑑として萬代國民の、殊に婦人の、景仰措かざるものあるは喋々を要せざるも、此の御書狀にも、見らるゝが如く、朝幕間の一大事に處しても名分を守り、大義に順ひ、朝威を輝かしめ給ひし御功蹟の亦偉大なるものあるを、吾人は忘れてはならぬ。

本書狀を下鄕氏が感激措く能はずして複製以て諸家に頒ち、靜寛院宮の御德操を新らしく汎く傳へんとされたるは、寔に美擧といふべく、茲に感謝の意を以て、此の紹介の文を執筆する。（非賣品）〔中村〕

○敦煌秘籍留眞　一帙上下兩卷

神田喜一郎編

今より略ぼ三十年前、支那西陲の地、敦煌の千佛洞より夥多しき古寫文獻の發見せられ、之が英京の大英博物館、佛京の佛國々立圖書館に迻藏、世界的寶賣として著名なるは今更喋々を要せず、その總數概算は約一萬二千點と推測せられ、その中佛國にあるものは私も滯佛中に詳細に調査したが、正しく五千五百四十一點あり、第一號より第一九九九號までは梵文の小片が主にして、漢字漢文のもの甚だ尠く、こは何れも硝子板に挾みて藏せられる。第二〇〇〇號以上第五五四一號までは漢字漢文のものが主にして、此の中從來內容目錄も出來て公開閲覽を許されて居るのは第二〇〇〇號より第三五一一號までの一千五百十一點と、第四五〇〇號より第四五二一號までの二十二點と合計一千五百三十三點で、第三五一二號より第四四九九號まで、並に第四五二二號より第五五四一號までの計二千八點は、その將來者ペリオ教授宅に藏せらる若干を除き、私は一覽を爲し得たが、一般には尙ほ公開閲覽を許して居らぬらしい。臺北帝國大學神田喜一郎教授在外研究員として渡佛せらるるや佛國々立圖書館に就きて此等文書を調査せられ、その中の貴重なるものを親しく寫眞に攝られ之を珂羅版に附して一百部の限版とせられ羽田亨博士の題簽を以て錦上に花を加へ以て同好に饋贈せられたるもの實に本書である。今其の內容を一瞥するに主として第二〇〇〇號より第三五一一號までの既公開の部分に屬して居り、一點だけ第四六三四號の永徽令遺文を採錄されてある。

神田教授もその序に謂はる通り、此等古寫本、並に文書にして從來學界に紹介せらるるもの、沙州文錄、敦煌石室碎金、敦煌

援瑣など相當に公刊せらるるも何れも文字の迻錄にして寫眞を紹介して居らぬ。編者即ち之を憾とし、茲に標本的ではあるが各々その一部分を寫眞として原本の面影を偲ばしむるよすがと爲したるもの、嘗て此等の原本を見たる人々には故人に遇ふの感を懷かしむる。採錄するもの合計六十三種・キヤビネ版寫眞八十二葉・古文尚書・毛詩音・禮記注・春秋經傳集解・同穀梁傳集解・論語集解・論語義疏・孝經注・爾雅注・切韻の類より史記・常府君碑・唐永徽令・唐律・唐律疏議・散頒刑部格・天寶六載敦煌縣戶籍・帝王略論・藥方書・冥報記・老子類・无上祕要・閻紫錄儀・法句經・大槃涅槃經・出家人受菩薩戒法・大智度論・法華經義記・維摩經義記・十地義疏・法琳別傳・傳法寶紀・一切經音義・梁武帝發願文・楚辭音・敦煌廿詠・文選・文選音・舞譜など四部の書・內外典に亙り、先づ第二〇〇〇號乃至第三五一一號間の主なる貴重稀覯書類を網羅してあり、編者の深造博洽の學識が自ら躍如たるものがある。本書は寫眞集にして說明文は無けれども、用意周到なる編者のことなれば、恐くは將來何か之に關する論著を追刊せられて我等を啓發しくることと信ずるが、さしあたりは民國の王重民君の巴黎敦煌殘卷叙錄卷一と併せ見れば益を受くること蓋し尠少ならずと考へられる。佛國々立圖書館配屬の寫眞師の技術の拙劣なる爲折角の寫眞が歸朝後殆んど用を爲さざる苦き經驗を嘗めたる一人なる私は、同君が之に依囑せずしてよく親しく撮影せられ我國にその留眞を齎らし以て學界に寄與せられたる努力と功績とに對し滿腔の敬意を表する者である。（昭和十三年二月五日發行、限印壹百部、發行所　京都市油小路正面下ル小林寫眞製版所）（那波利貞妄言）

○東亞大陸諸國疆域圖

東方文化學院京都研究所編纂
理學博士　小川琢治　監修

本圖の編纂過程並に資料に就いては昭和十一年二月發行の「東方學報」京都第六册に太田喜久雄氏が「中華民國及滿洲國疆域圖製作過程に就て」といふ論文を發表して詳細に述べて居られる。東亞大陸諸國疆域圖とは出版に際して名を變へたものである。東方文化學院京都研究所が創立以來の事業として實に九年の歲月を費して成つた者だけに、資料の正確、體例の整備せる點に於て他に類を見ない。特にアルバース氏式等積多圓錐圖法による嚴密な座標の算出と、廣く日本、支那、西洋で發行された各種の地圖や旅行記を蒐集し比較檢討を行つた事とは內外に於ても劃期的な事といへる。支那の如きに於ては全く同一地域を表はした圖にあつても資料の選擇次第で著るしい相違のある事は驚くべき事であつて、前掲太田氏論文中南京の位置の比較圖を見ても思ひ半ばに過ぎる者がある。此の間小川琢治博士監修の下に校正に當られた太田氏、作圖の爲に不斷の勞力を拂はれた小野三正氏等の苦心は想像に餘りある。其の上銅版彫刻に當られた齋藤巳代治氏の學術的作品に對する獻身的な努力がなかつたならばかゝる美麗な體裁を整へる事は出來なかつたであらう。支那の地圖帖としては近出の支那地圖學界の傑作といはれる「中華民國新地圖」及び「中國分省